

---

# 笑えるMR.D

小松鴉変

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑えるMR・D

### 【Nコード】

N9607D

### 【作者名】

小松鴉変

### 【あらすじ】

僕があいつと出会ったのは夜だった。名前がとても長いあいつ、変な事ばかり言うあいつ。・・ねえ、だから三丁目のミシエルって誰？

## Prologue

「あ」

その瞬間、我輩が死期を悟ったのは言うまでもない。

何時もと違う道を通った事が仇となったのか。其れとも冬至の闇を過大評価していたのか。

だが、今は反省だとかそんな時間の産物に思考を向けている場合ではないはずだ。

小さな眩き、揺れる肩、向けられた視線、揺れる青。

ああ、まずい。非常にまずい。

これは三丁目のミシエルに行くわしたあの日よりも、非常に分の悪い状況だ。

考えれば考えるだけ焦りは増し、終いには頭が諦めた様に真っ白になり、嫌な汗が滲み出す。

その汗の伝う感覚に、急速に何かが冷めていく。硬直寸前だった体がバキッと、嫌な音を立てた。

まずい。これも非常にまずい。

これは三丁目のミシエルが両親を連れて来た時よりも、非常に情けない状況だ。

老体に鞭打って散歩に出た結果、短時間の硬直で骨が折れました、だなんて。

ああ、笑えない。笑える訳がない。

だが、こうして考えていてもいいのだろうか、ぼんやり思いながら髪を触る。

ああ、枝毛が・・・じゃない。そんな場合ではなかったはずだ。

まずいまずいと思ってる時間が、そもそも惜しい事に気づく。

目線を泳がせれば、こちらを見つめる少年が変わらず石像の様にそこに居て。

何だか安心して息が漏れる。

とにかくこの状況を良い方向に持っていくことから考えようか。ゆっくりと空を仰ぎ、共に手を伸ばした。

ああ、眩しい上に五月蠅くて。偉ぶる上に、昔も今も面倒くさいなお前。

それは笑っていた。酷く嬉しそうに、楽しそうに。

ざまーみろとか言ってるそうだ、と。口元を歪め、震える手を握り締めた。

## Act 1：見えるもの

少女は言った、これは何処のお化け屋敷で、これは何処の吃驚番組なんだと。

街の外れに小さな喫茶店がある。ケーキの種類が豊富な上、ウェイトレスのねーちゃんが別嬪という穴場だ。

あ、そんな事聞いてないとか言うと後悔するのはお前だぞ。後で連れってやるうと思っただのになー・・・ん、素直で宜しい。

で、だな。見て分かる通り隣にはまた小さな本屋がある。店長のトイ爺さんと仲良くなると便利な店だ。

爺さんの気分次第では本が半額になる。ああ、覚えておけ。

で、その隣の細い道を突き進むと十字路に出る。ああ、そこ。面倒臭いと言わない。

そこを真っ直ぐ進んで、角を曲がると。蔦が全体に廻る様に絡まった、建物が聳え立っている。

不気味で気持ち悪いという評価の所申し訳ないが、目的地はあれだ。煉瓦造りの街から少し飛び出た場所とはいえ、異質な古びたコンクリート造りの大きな建物は、

大きさとは違う存在感と、見た者を引きずり込んでいく様な、恐怖にも似た不気味さを発揮している。

そこには、スーツを着た・・・そう、今の俺の様にまるでSPの様な格好をした中ね・・・いや、青年が多く出入りしていた。

おい、笑いを堪えながら指すな・・・今、おっさんという単語が出たのはこの口か。

建物の中に入ってみると、外見に負ける劣らずまた可笑しい状況が存在している。

今流行・・・かどろかには知らないが、省エネルギーというやつなのか。

はてまた、これは流行であってほしくないが・・・何かの呪いでもかけられているのか。

とにかく暗い。暗すぎる。夏の夜よりも暗いのでは、と錯覚させてくれる程に。

共に、そこは静かだった。ああ、可笑しいだろう？

さつきから五月蠅い程、人が行き来を繰り返しているというのに

足音一つしないなんて。

何にぶつかる事も、何に躓くこともなく歩く男達。

この光景は、何も知らない街の奴らの眼には、建物の外見よりも異様に映るんだろうなってしみじみとそう思う。

ああそれでも、俺が初めて此処に来たときに感じた違和感に奴らが気づくとは思えない。

何故なら、街に住む人間のほとんどはそもそも建物の存在に気づいてはいないからだ。

いや、在るという事は知っていたはずだった。昔の話になってしまふのが何とも惜しいけど。

しかし今となっては、覚えている奴なんてそう見つかることはない。

だから、稀に覚えていた奴が居ると面倒臭えんだ。

その覚えてる側の大概は、街では大きな割合で「冒流者」だとか、「狂人」だとか、「化け物」だとかいう、不名誉な称号や扱いを受ける。

ああ、俺はなんと呼ばれていたか・・・忘れてしまったが。野菜売りのおばちゃんにトマトを投げられた事だけは覚えているよ。

しっかりと避けたから当たりはしなかったが・・・あれは最悪だった。なんせ、その後本当に赤くなっちまったんだから。って、何で笑っ

てんだお前。

・まあ、俺としてはだな。そういう事をする側の方がよっぽど冒険してるし、狂ってるし、化け物だって思うわけだ。  
繰り返して、繰り返して。それこそ狂ってやがんのかな。  
だけど、そう言いたくなる気持ちも理解出来る。

なんせそいつには、ないはずのもんが見えてんだからな。

人間、自分と違えば怖くなるもんだから。どう対応するかとなれば、つい力に走る。  
いけない事だと知ってはいるが、体が勝手に・・・という屁理屈を捏ねたがる。

覚えてる奴は、不幸なのかもしれない。

俺もあの中で、一瞬だけ不幸なんじゃねえかと考えたよ。  
ただどな、違う視点から見た場合そいつはとても希少価値の高い有望な人間という判断だつてされることもあるんだ。

そう、今の俺みたいにな。・・・なんだその目は、有望な訳がないって言いたいのか？

いやいや、十分基準は満たしてるんだよ俺は。ほら、その証拠にお前今、見えてんだろ？

この会社が。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9607d/>

---

笑えるMR.D

2010年10月14日14時14分発行